

## 論文

## エントラーダにおけるナーチトゥンの役割に関する一考察

佐藤 孝裕

## 1、はじめに

マヤ長期暦の 8.17.1.4.12 11 エップ Eb 15 マック Mak (378 年 1 月 15 日) は、古典期前期の低地南部マヤ社会にとって分水嶺とでもいうべき日である。この日に、同地域の政情を大きく塗り変えることになる非常に重要なことが起こったと考えられているからである。爾後、様々な遺跡のモニュメントのテキストに、この日付がしばしば言及されていることが、この重大性を如実に物語っている。この日を境に、古典期マヤ社会を代表する大国であるティカル Tikal では支配勢力が代わったと考えられている。また、この地域の土器、建築、図像などに、メキシコ中央高原を拠点にメソアメリカ全域に影響を及ぼした巨大な国家であるテオティワカン Teotihuacan を想起させる要素が、ふんだんに出現するようになる。この出来事の真相はいまだに明らかになっておらず、研究者の間でも、大きく「外因派」と「内因派」の二つに分かれて論争されている (Canuto et al. 2020: 378-380; Magaloni-Kerper, O'neil and Uriarte 2020: 196; Spence 2020: 474; Stuart 2000: 465-466)。前者は、テオティワカンがこの出来事に積極的に関与していたとする説で、テオティワカンによる軍事的征服事業の一環であったと考える者も少なくない。後者は、主体はあくまでもマヤ人の側にあり、研究者によってその度合いに差はあれ、テオティワカンの関与は間接的なものに過ぎなかったとする説である。

標高 2000m を超える高原地帯に位置しているテオティワカンが、直線距離でも約 700km 以上離れているのに加え、熱帯雨林という全く環境が異なる南部低地マヤ地域に対して軍事行動を起こすのは、兵站の観点からも無理があり、現実的でない (Spence 2020: 466, 471)。エントラーダにテオティワカンの軍隊が直接関与していたと唱える研究者も、この点は認識していて、マヤ人側に侵略を手引きする勢力が存在しなければ、征服行為は成就しないことを認めている (Nondédéo, et al. 2014: 117, 2016, 2019: 57)。近年、まさにこのテオティワカンと同盟関係にあり、従って「外因派」説を支持する有力な遺跡と主張されているのがナーチトゥン Naachtun である。本稿では、この説の蓋然性について論じたい。

## 2、ナーチトゥンの建国とエントラーダ Entrada 前夜

ナーチトゥンは、先古典期後期の大遺跡がいくつも存在するミラドル Mirador 盆地の北東端にあり、ティカルとカラクムル Calakmul の間に位置する (図 1) (Hansen et al. 2009: 27;



図1 南部低地マヤ地域 (Houston & Inomata 2009 Figure 1.2 を転載)

Mathews, et al. 2005: 669; Nondédéo, et al. 2013: 123-125)。古典期に激しく争った二大強国に挟まれているという地理的環境は、ナーチトゥンが両国の対立関係に必然的に巻き込まれることを余儀なくした。

ナーチトゥンが創建されたのは、150年頃のようなのである (Nondédéo, et al. 2013: 125-126, 2014: 116, 2016, 2021: 87)。この時期に、低地南部マヤ社会の歴史を考える上で、極めて重要な出来事が起こっている。それは、2000年以上に及ぶマヤの歴史の中でも、最大規模の建築物を擁していたエル・ミラドール El Mirador の崩壊である。この頃、花粉分析の結果からミラドール盆地で大規模な人口減少が起こったことが判明しており、事実エル・ミラドールを始めとして、ナーチトゥンを除く殆どの都市が放棄されている (Hansen and Guenter 2005: 60-61; Hansen et al. 2008: 33-34)。ほぼ同じ時期にナーチトゥンが創建され、エル・ミラドールが放棄されたのは、単なる偶然とは考えられない。これにはいくつかの理由がある。一つは、ナーチトゥンでは主要な建築グループが東西に配置され、それぞれがサクベで連結されているが、規模の点ではかなり見劣りするものの、パターンとしてはエル・ミラドールと共通している。また、ナーチトゥンの土器は、エル・ミラドールの土器伝統を共有している。更には、それ以前に居住の痕跡が乏しいこの地が、この時期から突然繁栄し始めるのは、他の場所から人々が移住してきたと想定しないと説明が付きにくい。しかも、エル・ミラドールとナーチトゥンはわずか20kmほどしか離れていない。これらのことから、ナーチトゥンはエル・ミラドールを放棄した住民が移住してきて、新たに建設したのではないかと推測されているのである (Nondédéo, et al. 2013: 126-127, 2016; Walker and Reese-Taylor 20012: 8, 22-23)。

ナーチタウンの中心部に建設された建築グループが、東西方向に沿って並んでいると先述したが、西から順にC、A、Bと名付けられており、この順に発展したようである（図2）。すなわち、最初の居住区はグループCであり、ここで確立された権力の所在地は、時代の推移と共に東に移動した。

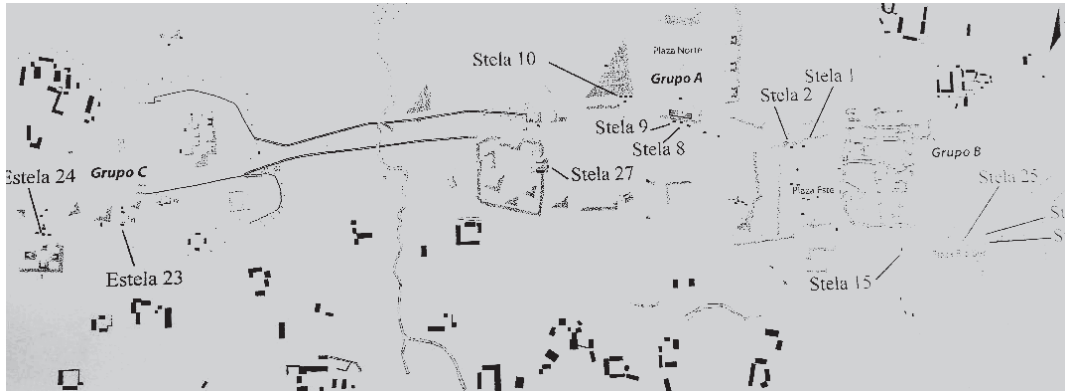


図2 ナーチタウン中心部（Nondédéo, et al. 2021 Figure 6.1 を転載）

4世紀半ばになると、都市としての本格的な発展が始まり、土地を造成して多くの建築物が建てられた。この発展は、王朝の創立に伴うものと考えられている。この王朝の存在を示唆していると見られるのが、グループCに建立された石碑23と石碑24である。これらのモニュメントのテキストによると、少なくとも8.16.4.10.16 イミシュ Imix 4 セック Sek (361年8月1日)以来、ナーチタウンは「スーツ・アハウ」(”Suutz’ajaw”), すなわち「コウモリのアハウ」と称する支配者が治める国の根拠地であった。いわば、「コウモリ王国」の首都であった。そして、この二つの石碑こそ、ナーチタウンがエントラーダに深くかかわったことを示唆するモニュメントだと指摘されているのである。更に、この時期には土器にも変化が見られる。先古典期後期にミラドール盆地とのつながりがあったのに対し、古典期に入るとティカルやワシャクトゥン Uaxactun などペテン Peten 中心部で出土する土器と類似した様式を持つ土器が出現する（Nondédéo, et al. 2014: 117, 2016）。ティカルを中心とするこのペテン地方こそ、エントラーダの発端となった出来事が起こり、その後低地南部マヤ社会を覆う「新秩序」の枢軸となった場所である。では、「新秩序」を形成する端緒となったエントラーダとはどのような事件であり、ナーチタウンがこれにどのようにかかわっていたと考えられているのであろうか。

### 3、ナーチタウンとエントラーダとの想定上のかかわり

8.17.1.4.12、シフヤフ・カフク Sihyaj K’ahk’ という名の人物がティカルに到着する。「エントラーダ」と呼ばれるこの出来事は、ティカルの石碑31とマルカドール、ワシャクトゥンの石碑5と石碑22、ラ・スフリカーヤ La Sujricaya 出土の彩色テキストに記されている。ある人物が到着したということが、いくつもの都市の記録に残されているということは、この事実がいかに

重要であったかを物語っている。事実、古典期前期の低地南部マヤ社会の政情に大きな影響を与え、「新秩序」を築くに至った変動は、この出来事に端を発しているのである。

シフヤフ・カフクは、ティカルに到着する7日前の8.17.1.4.3 3カン Kan 7マック (378年1月8日)に、ティカルの西方78kmにあるエル・ペルー El Perú に立ち寄ったことが、同地の石碑15に記されている (Eppich 2009: 2; Freidel y Escobedo 2004: 412; Freidel et al. 2007: 193; Martin and Grube 2008: 29-30; Stuart 2000: 479-480)<sup>(4)</sup>。エントラダという大事業を起こす直前に訪れたことから、シフヤフ・カフクが行おうとしていた企てに、エル・ペルーが何らかのかかわりを有していたことは疑いないであろう。しかし、エル・ペルー以上に深く関与していた、というよりも、シフヤフ・カフクの事業を積極的に支援していた可能性が指摘されているのがナーチトゥンである (Guenter 2014: 150-153; Nondédéo, et al. 2016, 2019: 55)。

石碑23と石碑24は、共にナーチトゥンの最古の居住区域であるグループCにある (図2)。マヤ地域で最初に紋章文字が生起するのが、ナーチトゥンの石碑23である (García Capistrán y Rodríguez 2017)。このモニュメントには、8.16.4.10.1 1イミシュ4セック (361年8月1日)の日付と共に、この国の支配者がスーツ・アハウの称号を伴って言及されている (Nondédéo, et al. 2014: 116, 2019: 63)。

石碑23より少し遅く、エントラダ後間もない380年から400年頃に建立されたと考えられているのが石碑24である (Nondédéo, et al. 2021: 89)。何らかの理由で上部は欠損し、12文字が刻まれた一部だけが現存している (図3)。そこには8.16.6.8.1 10イミシュ14ウオ Wo (363年6月13日)、8.17.1.4.11 9オック Ok 13マック (378年1月13日)、8.17.1.4.10 10チュウエン Chwen 14マック、8.17.1.4.12 11エブ 15マックの日付が言及されている (Nondédéo, et al. 2019: 57; Stuart 2014)。すなわち、エントラダ当日までの三日間と、それに先立つ14年余前の日付

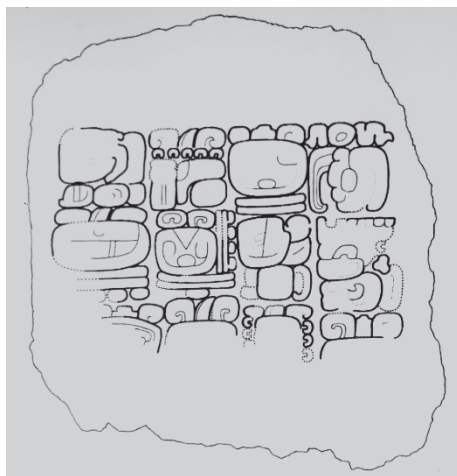


図3 石碑24 (Nondédéo, et al. 2019  
Figura 3. を転載)

である。最初の日付が何を意味するかは不明だが、残る三つの日付がエントラダと何らかのかかわりを持つであろうことは疑いない。そのことは、シフヤフ・カフクの名が刻まれていることから明らかである。しかも、「クフル・スーツ・アハウ」(“k’uhul Suutz’ ajaw”)「コウモリの神聖王」の称号を持つb’u-JOLあるいはmu-JOLと読める人物が、シフヤフ・カフクの「ヤハウテ”yajawte””として言及されている (Canuto 2020: 380; Nondédéo, et al. 2014: 116-117, 2016; Stuart 2014)。

ここで注目されるのが、石碑23では単にスーツ・アハウという称号を称していた支配者が、1~2世代後に建立されたこのモニュメントでは、クフル

「神聖な」という新たな形容詞を加えた称号を用いていることである。すなわち、この b'u-JOL あるいは mu-JOL なる人物が、何らかの思惑で、自らの称号として「クフル〜アハウ」を導入したのであり、これ以降、古典期のマヤの君主たちは紋章文字と名付けられたこの称号を採用し続けるのである（Nondédéo, et al. 2019: 64; García Capistrán y Rodríguez 2017）。この新たな称号の導入とエントラダが、何らかの関連を持っているのかについての議論は、他日を期したい。

”yajawte”の意味に関しては、研究者の間でも「家臣」（Canuto et al. 2020: 380; Stuart 2014）と「戦争指揮官」（Hansen et al. 2008: 60; Nondédéo, et al. 2014: 117, 2019: 57-60; Tokovinine 2008: 268）の二説に分かれている。いずれにしても、ナーチトゥンがシフヤフ・カフクに服属していたと考えている点では同じである。エントラダ後、ティカルの政体は大きく変わる。まず、シフヤフ・カフクがティカルに到着したまさに同日、アハウであったチャック・トック・イチャーク Chak Tok Ich'aak I 世が、恐らく死去する<sup>(2)</sup>。その後、8.17.2.16.17 5 カーバン Kaban 10 ヤシュキン Yaxk'in (379年9月13日) ホ・ティナム・ウィッツ Ho' Tinam Witz（「五つの木綿の山々」）王ハソーム・クイ Jaz'oom Kuy の息子であるヤシュ・ヌーン・アヒーン Yax Nuun Ahiin が、シフヤフ・カフクの監督下ティカルのアハウに即位する。つまり、エントラダの主役であるシフヤフ・カフクは、ティカルの王位に即いていない。その代わりに、彼の姿はティカルの周辺でしばしば見られるようになる。彼の名は、378年と396年にワシャクトゥン、379年にラ・スプリカーヤとエル・サポータ El Zapote、381年頃にエル・ベフカル El Bejucal とエル・ソッツ El Zotz、393年にリオ・アスル Rio Azul で言及されるのである（図1）（Canuto et al. 2020: 380）。エントラダの主役であり推進者であったにもかかわらず、事業を成し遂げた後にどの国の王位にも即かず、それでいて明らかに広範囲の国々で重要視されていたことが、この人物の素性をますますわかりにくくさせている。

#### 4、ナーチトゥンはテオティワカンの橋頭堡だったのか

シフヤフ・カフクの到着に始まるエントラダがテオティワカンによる武力侵略であり、ナーチトゥンはシフヤフ・カフクによる軍事的侵略行為に加担したとする説の最大の根拠は、碑文に記されている「ヤハウテ」を戦争指揮官と解釈することにある（Nondédéo, et al. 2014: 117, 2016, 2019:57）。すなわち、ナーチトゥンの支配者がシフヤフ・カフクの戦争指揮官であるということは、シフヤフ・カフクはナーチトゥンを指揮下においた上位の存在であり、ナーチトゥンは彼の指図の下で侵略行為を手助けした、と解釈するのである。しかも、ティカル到着の前に、エル・ペルーとナーチトゥンに立ち寄っていることは、シフヤフ・カフクの行動が入念な計画の下に実施された戦争行為であることを示すのに加え、支援する勢力が予め現地に存在することになり、距離的に遠く離れ、環境も大きく異なる低地南部マヤ地域への征服行為で障害となる兵站上の問題を克服できるというのである（Nondédéo, et al. 2016, 2019: 62-63）そして、シフヤフ・カフクを手助けしたマヤ人側勢力の主体となったのがナーチトゥンであり、それがエントラダ

後のナーチトゥンの繁栄につながった、という訳である。

しかし、「ヤハウテ」の解読は、まだ定まっていない。先述したように、「家臣」と解読する研究者も少なくない。それでも、確かにナーチトゥンがシフヤフ・カフクが率いる勢力に屈服していることに変わりはない。では、シフヤフ・カフク自身、テオティワカンの軍隊を率いてきていたのであろうか。現地マヤ人の加勢を得るにしても、テオティワカン主体の軍事行動を発動したのであるならば、相当数の兵を率いていたはずである。その証拠はあるのであろうか。ティカルのマルカドールの碑文テキストの "och ch'een" を「町に入った」あるいは「領土に入った」を解読できると主張し、この表現がシフヤフ・カフクのエントラダが軍事的侵略だと解釈する研究者もいるが、これも確定した説ではない (Stuart 2014; Nondédéo, et al. 2019: 60-61)。

テオティワカンの軍隊がペテンに侵入したことを証拠づけるものとして挙げられるのが、ティカルの PD50 で出土した三脚シリンダー土器である (図 4)。ここには、タルー=タブレーロ様式建築の建物を出発した 6 人のグループが左に進み (3)、同じくタルー=タブレーロ建築だが、四面に階段が張り出しているマヤ風の神殿建築の前で、一人のマヤ人らしき人物に迎えられている (2) (Marcus 2003: 339-342; Moholy-Nagy 2021: 486, 494, 496; Robb 2020: 182; Schele and Freidel 1990: 161)。前を進む 4 人は槍投げ器や矢などの武器を携行し、後の二人は丸腰で大きな房のついた頭飾りを被っている。確かに 4 人の戦士たちは武装しているが、武装は兵にとっていわば正装である。たとえ戦争に赴くのではないにしても、兵が軍務で遠征する際に武装するのは当然であろう。しかしながらこの光景を見る限り、両者の関係は友好的であり、平和裏にやり取りしているように思われる。この土器が出土したのはティカルであり、ここにシフヤフ・カフクが到着したのがエントラダであったことを考えると、この土器に描かれているのがテオティワカン戦士であったとしても、友好的な交流が行われているようにしか見えないし、逆に言えば軍事的侵入とは程遠い光景である。

また、仮にナーチトゥンがシフヤフ・カフクとエントラダの前から同盟関係を締約していたならば、それを示す特徴が見られるはずである。これを例証するものとして挙げられるのが、パチューカ産緑色黒曜石やシリンダー土器、器壁の薄いオレンジ土器などテオティワカンによる流通と関係性の深い遺物の出土である (Nondédéo, et al. 2016)。しかし、これらの製品の出土は、ナーチトゥンとテオティワカンの間に何らかの交流があったことを示すものではあるが、軍事も含む同盟関係にあったとまではいえない。そもそも、テオティワカンとマヤ地域の交流は 100 年頃には始まっているし、ティカルの「失われた世界 (Mundo Perdido)」にある建物 5C49 と 5C54 では、3 世紀にはタルー・タブレーロ建築が採用されている (Canuto 2020: 374, 377; Laporte 2003: 200-201)。テオティワカン製であれ、それを模倣したものであれ、テオティワカンに由来する製品や芸術、建築がマヤ低地南部で見られても、なんら不自然ではない。エントラダとマヤ地域の交流は別個の性格を持つものであり、同列に論ずべきでない。

そして、何よりも最大の難点は、シフヤフ・カフクがテオティワカン出身であることを示す根

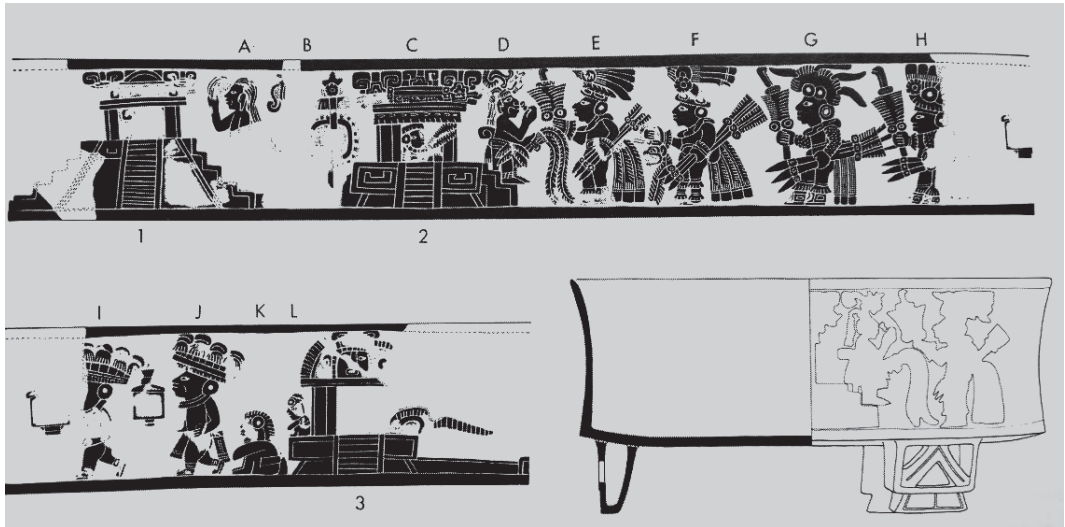


図4 ティカルのPD50出土の三脚シリンダー土器と彫られた画像 (Moholy-Nagy 2021 Figura 4. を転載)

拠が全くないことである。一般論として、碑文学者の多くが、エントラダをテオティワカンによる低地南部マヤ地域の侵略行為だと主張するのに対し、考古学者はそれに否定的な傾向があるようであるが、そもそも碑文学者が重視する碑文史料に関しても、シフヤフ・カフクとテオティワカンを関係づけるものは皆無なのである (Kováč y Barrois 2012: 120; Spence 2020: 474)。

## 5、おわりに

ナーチトゥンがテオティワカンを盟主とする同盟関係にあり、テオティワカンから派遣されたシフヤフ・カフクの軍事行動を援護した、とする説は、いまだ根拠が薄弱であり、この説が成り立つためには説明されなければならない点がきわめて多い。

- ナーチトゥンがテオティワカンを盟主に仰ぎ、同国の低地南部マヤ地域への侵略行為に協力するのに何の利点があるのか。
- シフヤフ・カフクは何者か。
- 仮にペテン地方に提携国があったにせよ、そこに至るまで大軍が700km以上もの行軍を行うことが可能か。交易集団ならともかく、軍隊の通過を経路沿いの国は許可するのか。
- 征服の対象はなぜティカルだったのか。

等々である。

本来、碑文は見せるためのものであり、製作者が主張したいことが表現されており、逆に事実が述べられているとは限らない。従って、その内容の解釈に関しては、他の考古学資料を援用し、慎重に進める必要がある。エントラダを、テオティワカンから派遣されたシフヤフ・カフクが主体となり、提携国であるナーチトゥンなどと共に推進したマヤ低地南部への侵略だった考えるには、証拠が不十分であると考ええる。

[註]

- (1) ここで、シフヤフ・カフクはカロームテとして言及されているのだが、これはシフヤフ・カフクの名が生起する初めての例であると同時に、カロームテ称号の初見例でもある (Kováč y Barrois 2012: 117、119、123-124; Martin 2020: 122)。
- (2) 石碑 31 では、och ha「水に入る」と隠喩的に表現されているが、死んだことを表すものと思われる。

参考文献

- Canuto, Marcello A., Luke Auld-Thomas, and Ernesto Arredondo  
2020 Teotihuacan and Lowland Maya Interactions: Characterizing a Mesoamerican Hegemony. In *Teotihuacan: The World Beyond the City*, edited by Kenneth G. Hirth, David M. Carballo, and Barbara Arroyo, pp.371-408. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washinton, D.C.
- Eppich, Keith  
2009 Feast and Sacrifice at El Peru-Waka': The N14-2 Deposit as Dedication. *The PARI Journal*, vol.X, No.2, pp.1-20.
- Freidel, David y Hector L. Escobedo  
2004 Sintesis de la primera temporada de campo del proyecto arqueológico El Peru-Waka'. En *PROYECTO ARQUEOLÓGICO EL PERÚ-WAKA': INFORME No.1, TEMPORADA 2003*, editado por Hector L. Escobedo y David Freidel, pp.409-424, DIRECCIÓN GENERAL DEL PATRIMONIO CULTURAL Y NATURAL DE GUATEMALA, Guatemala.
- Freidel, David A., Hector L. Escobedo, and Stanley P. Guenter  
2007 A Crossroads of Conquerors: Waka' and Gordon Willey's "Rehearsal for the Collapse" Hypothesis. In *Gordon Willey and American Archaeology*, edited by Jeremy A. Sabloff and William Fash, pp.187-208. University of Oklahoma Press, Norman.
- García Capistrán, Hugo y Eduardo Salvador Rodríguez  
2017 Evidencia de la presencia de Siyaj K'ahk' en Río Azul. Nuevo registro de los monumentos esculpidos de la ciudad y nuevos enfoques para entender el "Nuevo Orden" en el área maya. En *XXX Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2016*, editado por Bárbara Arroyo, Luis Méndez S., y Gloria Ajú Álvarez, pp.643-656. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.
- <http://www.asociaciontikal.com/wp-content/uploads/2021/02/55-Garcia-y-Rodriguez.pdf>
- Guenter, Stanley Paul  
2014 The Epigraphy of El Perú-Waka'. In *Archaeology at El Perú-Waka': Ancient Maya Performances of Ritual, Memory, and Power*, edited by Olivia C. Navarro-Farr and Michelle Rich, pp.147-166. The University of Arizona Press, Tucson.
- Hansen, Richard D.



- 2000 The First Cities—The Beginnings of Urbanization and State Formation in the Maya Lowlands. In *Maya: Divine Kings of the Rain Forest*, edited by Nikolai Grube, pp.50-65. Könemann Verlagsgesellschaft mbH, Cologne.
- Hansen, Richard D. and Stanley P. Guenter
- 2005 Early Complexity and Kingship in the Mirador Basin. In *Lords of Creation: The Origins of Sacred Maya Kingship*, edited by Virginia M. Fields and Dorie Reents-Budet, pp.60-61. Los Angeles County Museum and Art, Los Angeles.
- Hansen, Richard D., Wayne K. Howell, and Stanley P. Guenter.
- 2008 Forgotten Structures, Haunted Houses, and Occupied Hearts. In *Ruins of the Past*, edited by Travis W. Stanton, and Aline Magnoni, pp.25-64. University Press of Colorado, Boulder.
- Houston, Stephen and Takeshi Inomata
- 2009 *The Classic Maya*. Cambridge University Press,
- Kováč, Milan y Ramzy R. Barrois
- 2012 El papel de Sihyaj K'ahk' en Uaxactun y el Petén Cental. En *Contributions in New World Archaeology, vol.4. Maya Political Relations and Strategies*, editado por J. Zalka, W. Koszkuł y Beata Golinska, pp.113-126. Jagiellonian University, Polish Academy of Arts and Science, European Association of Mayanists, Cracovia
- Laporte, Juan Pedro
- 2003 Architectural Aspects of Interaction between Tikal and Teotihuacan during the Early Classic Period. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction*, edited by Geoffrey E. Braswell, pp.199-216. University of Texas Press, Austin.
- Magaloni-Kerpel, Diana, Megan E. O'neil, and María Teresa Uriarte
- 2020 The Moving Image: Painted Murals and Vessels at Teotihuacan and the Maya Area. In *Teotihuacan: The World Beyond the City*, edited by Kenneth G. Hirth, David M. Carballo, and Barbara Arroyo, pp.193-224. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- Marcus, Joyce
- 2003 The Maya and Teotihuacan. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction*, edited by Geoffrey E. Braswell, pp.337-356. University of Texas Press, Austin.
- Mathews, Peter, Kathryn Reese-Taylor, Marcelo Zamora y Alexander Parmington
- 2005 Los monumentos de Naachtun, Peten. En *XVIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2004*, editado por J.P. Laporte, B. Arroyo y H. Mejía, pp.669-672. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.
- Moholy-Nagy, Hattula
- 2021 A Reversal of Fortune: Problematical Deposit 50, Tikal, Guatemala. *Latin American Antiquity*, vol.32, No.3, pp.486-502.
- Nondédéo, Philippe, Alejandro Patiño, Julien Sion, Dominique Michelet, and Carlos Morales-Aguilar

2013 Crisis Múltiples en Naachtun: aprovechadas, superadas e irreversibles. In *Millenary Maya Societies: Past Crisis and Resilience*, edited by M.-Charlotte Arnaud and Alain Breton, pp. 122-147. Electronic document, published online at Mesoweb: [www.mesoweb.com/publications/MMS/9\\_Nondedeo\\_etal.pdf](http://www.mesoweb.com/publications/MMS/9_Nondedeo_etal.pdf)

Nondédéo, Philippe, Lilian Garrido, Alejandro Patiño, Alfonso Lacandena, Ignacio Cases, Eva Lemonnier, Dominique Michelet, Julien Hiquet, Chloé Andrieu, Carlos Morales-Aguilar, Julio Cotom, Louise Purdue, Divina Perla, Hemmamuthé Goudiaby, Giovanni González, Céline Gillot, Alejandra Díaz, Jackeline Quiñonz, Isaac Barrientos, Julien Sion, Lydie Dussol y Mariana Colin.

2014 Una Mirada hacia Naachtun después de cinco años de investigación (Proyecto Naachtun 2010-2014). En *XXVIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala*, editado por Bárbara Arroyo, Luis Méndez Salinas y Lorena Paiz, pp.115-123. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.

Nondédéo, Philippe, Alejandro Patiño, Alfonso Lacandena, Ignacio Cases, Julien Hiquet, Sion, Dominique Michelet, Chroé Andrieu y Lilian Garrido

2016 El papel de Tetihuacán en la formación de una capital regional maya: el caso de Naachtun, Petén. En *XXIV Simposio de investigaciones arqueológicas en Guatemala 2015*, editado por Bárbara Arroyo, Luis Méndez y Gloria Ajú Álvarez, pp.91-101. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.

Nondédéo, Philippe, Alfonso Lacandena García-Gallo y Juan Ignacio Cases Martín

2019 Teotihuacanos y mayas en la entrada de 11 Eb' (378d.C.): nuevos datos de Naachtun, Péten, Guatemala. *Revista Española de Antropología Americana*, 49 (número especial), pp.53-75.

Nondédéo, Philippe, Julien Sion, Alfonso Lacandena García-Gallo, Ignacio Cases, and Julien Hiquet

2021 From Kings to Nobles: The Political-Historical Context of Naachtun at the End of the Classic Period. In *Maya Kingship: Rupture and Transformation from Classic to Postclassic Times*, edited by Tsubasa Okoshi, Arlen F. Chase, Philippe Nondédéo, and M. Charlotte Arnaud, pp.86-105. University Press of Florida, Gainesville.

Robb, Matthew H.

2020 Interlaced Scrolls and Feathered Banners: Markers of Culture in Teotihuacan and Beyond. In *Teotihuacan: The World Beyond the City*, edited by Kenneth G. Hirth, David M. Carballo, and Barbara Arroyo, pp.173-191. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Schele, Linda and David Freidel

1990 *A Forest of Kings: The Untold Story of the Ancient Maya*. Quill, New York.

Spence, Michael E.

2020 Teotihuacan and Its Distant Neighbors: Models for Interaction. In *Teotihuacan: The World Beyond the City*, edited by Kenneth G. Hirth, David M. Carballo, and Barbara Arroyo, pp.463-477. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Stuart, David

2000 "The Arrival of Strangers": Teotihuacan and Tollan in Classic Maya History. In *Mesoamerica's Classic*

*Heritage: From Teotihuacan to the Aztecs*, edited by David Carrasco, Lindsay Jones, and Scott Sessions, pp. 465-513. University Press of Colorado, Boulder.

2014 Naachtun's Stela 24 and the Entrada of 378. *Maya Decipherment*.

<https://mayadecipherment.com/2014/05/12/naachtuns-stela-24-and-the-enrada-of-378/>

Tokovinine, Alexandre Andreevich

2008 *The Power of Place: Political Landscape and Identity in Classic Maya Inscriptions*. PhD dissertation, Harvard University.

Walker, Debra S. and Kathryn Reese-Taylor

2012 Naachtún, Petén, Guatemala: First Analyses. *Foundations for the Advancement of Mesoamerican Studies*, FAMSI (online: <http://www.famsi.org/reports/06035/06035Walker01.pdf>).

<https://mayadecipherment.com/2014/05/12/naachtuns-stela-24-and-the-enrada-of-378/>